

カタツムリって殻を取ればナメクジになる？

佐賀市立本庄幼稚園（佐賀県佐賀市）

[4歳児]

<きっかけ>

園の周辺で見つけた様々な生き物を飼育していた。観察ケースを誰もが目にしやすいテラスに移動し、観察コーナーを設定したところ、子どもたちはよく覗いて観察するようになった。

ある日、A児が「カタツムリってさあ、殻を脱いたらナメクジになるんだよね？」と言った。保育者がクラスで、「カタツムリとナメクジは同じだと思う？」と聞いてみると、ほぼ全員が手を挙げ、「うん」「同じだよね」「そう、そう」などの返事が返ってきた。そこで、カタツムリとナメクジを一緒に観察してみることにした。



ナメクジ発見＝居場所に気付く

「ほら、ここにいたよ」「小さくて可愛いね」と、敷石の下からナメクジを発見する。子どもたちは、繰り返し虫探しをすることで、何処にどんな虫がいるのかに気付いていった。

カタツムリが出て来た＝様子をよく観る

「カタツムリがかくれんぼしているよ」「出て来た」など、自分たちの知っている言語を使って、カタツムリの様子を伝えようとしている。

カタツムリとナメクジは同じ？＝疑問をもって観る

「カタツムリって殻を取ったらナメクジになるんだよね？」「カタツムリとナメクジは似ている所がたくさん」「同じかな？違うのかな？」

絵本や実物を見ることで、生き物によってウンチの大きさや形などに特徴があることに気がつき始め、ウンチに対してとても興味を示していた。カタツムリの観察ケースを2つに分け、餌をキュウリとニンジンにしてみた。



カタツムリのウンチとナメクジのウンチをよく観ると…

「カタツムリがオレンジのウンチしてるよ」「何でだろう？」「ニンジン食べたからだよ」・・・カタツムリは、食べた物によってウンチの色が違うことに気付く。

「ナメクジのウンチは全部黒くて丸い」「大きさが違うもん」さらに観察していくと、長さにはばらつきがあることもわかった。

散歩から持ち帰ったカタツムリを大切にケースに入れていたが、ふたがきちんと閉まっておらず、外に出てしまっていた。近くにいた子どもたちが見付け、よく観てみると、濡れた体で通った跡が道のようにできていた。

カタツムリの道～足がないのに何で…？

「カタツムリの道ができていますよ」

「カタツムリって、足がないのに動いてるよ。すごいね」

「足が無いのに何で進むことができるのかな？」と保育者が尋ねると、B児が手を揺らし、「こうやってピロピロって歩くんだよ」C児「そうそう、こうやってね」と、二人で同じ行動をして見せた。



観察ケースから逃げ出したカタツムリに気付かず、テラスを走っていた4歳児が踏んでしまう。子どもたちは言葉を失って踏まれたカタツムリを見つめていた。この出来事を無駄にしないよう、殻と中身を分けてトレーに並べて観察すると、「殻を脱いでもナメクジじゃない」と全員がカタツムリとナメクジは違うと言い切った。そして、「僕、お墓作ってこようか」と一人が言うと、他の子どもたちも一緒に外に行きお墓を作った。この事をきっかけに、生き物の気持ちを考える言葉が多く聞かれるようになり、扱い方も優しくなっていた。

みどころ

子どものつぶやきを、保育者が取り上げて学級に投げかけたことから、みんなの関心事になっていきました。始めは、「カタツムリとナメクジは同じ」と思っていた子どもたちですが、よく観ているうちに、「カタツムリとナメクジは似ている所がたくさん」でも、「同じか？違うか？」と、次第に疑問を感じるようになりました。疑問をもつと、さらによく観て特徴や違いに気付くようになります。そして実感をもった気付きによって、生き物の気持ちを考えるまでに、子どもたちが変容したことは、「科学する心」の育ちにつながっています。